



能登やさしいこめづくり情報

令和 7 年 1 0 月
能登南部営農推進協議会
J A 能登わかば

土づくり編

暑さに負けない米づくりは土づくりから

営農情報を LINE で迅速に！
この QR コードから友達登録。
営農情報が迅速に届きます。



・土づくりは農業の基本であり、米づくりの第一歩です。秋に行う土づくりが、来年以降の米の品質を大きく左右します。

・中能登地区では、土壌中の有機物である「腐植」や、稲体を強固にし耐倒伏性を向上させる「ケイ酸」、初期生育や登熟を促進させる「リン酸」が不足傾向にあります。

そこで、来年産に向けて、①稲わらの鋤き込みによる有機物の補給、②土づくり資材の施用、③深耕による作土の確保、④収穫後の雑草防除を行いましょう。

1 稲わらの鋤き込み(秋起こし)について

< 中能登管内の状況 >

・ほとんどの地域の水田で、腐植が不足しています(図1)。
⇒腐植が不足すると、土の保肥力等が減少し、作物への養分供給が不足します。

対策

稲わらを 10 月中に鋤き込みましょう！

【ポイント】

- ・気温の高い10月中に秋起こしを実施しましょう。稲わらの腐熟促進資材を施用すると効果的です。
⇒ 秋起こしが遅れると、翌年の田植え後のガスの発生を助長します。
- ・稲わらには、ケイ酸などの養分が豊富に含まれているため、すき込んでほ場に還元しましょう。
- ・稲刈り後はほ場内に水が溜まらないよう水尻を開け、ほ場を乾かしましょう。
- ・稲わらを深くすき込むと、分解が進まなくなるため、秋起こしは浅めに実施しま

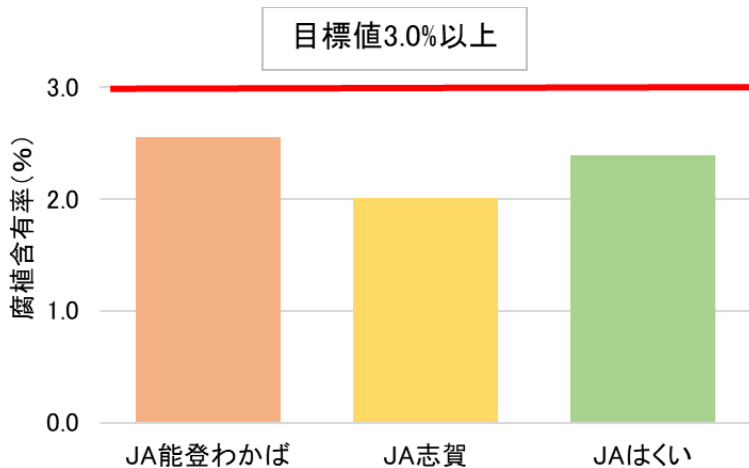


図1 水田土壌中の腐植含有量(平均値)

※ JA 能登わかば及び JA はくいは R6年度、JA 志賀は H30 年度の値

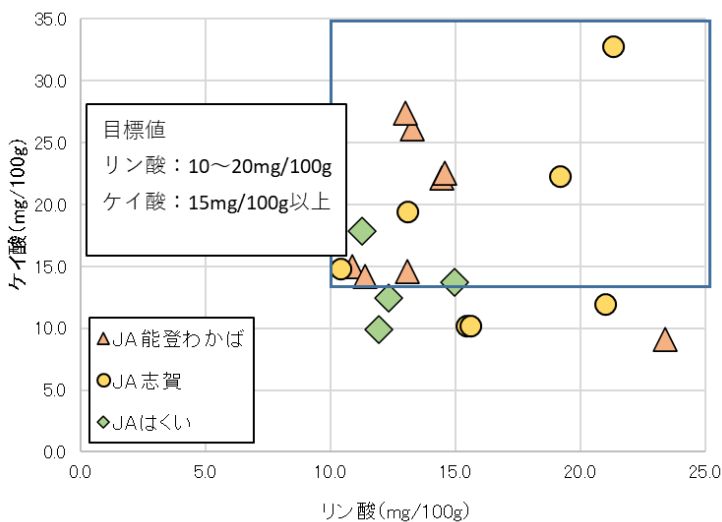


図2 水田土壌中のケイ酸とリン酸の含有率

※ JA 能登わかば及び JA はくいは R6年度、JA 志賀は H30 年度の値

2 土づくり資材の施用について(ケイ酸・リン酸の補給)

< 中能登管内の状況 >

- ・水田ほ場によるバラつきが大きいものの、一部の地域ではケイ酸及びリン酸が不足しています(図2)。
⇒ ケイ酸、リン酸が不足すると、登熟期間の高温などの気象変動に弱い稲となり、品質・収量に大きく影響します。

対策

積極的に土づくり資材を施用しましょう！

【ポイント】

- ・毎年、水稻の収穫によって必須元素を収奪しているため、積極的に土づくり資材を施用しましょう。
- ・稲わらの腐熟促進効果を高めるため、土づくり資材の施用は秋起こしと一緒に行いましょう。

土づくり資材の種類

※使用する資材は、地域に応じた種類とし、ほ場に応じて施用量を調整してください。

資材名	成分	施用量	備考
BB 能登にやさしい土づくり	・リン酸 5% ・ケイ酸 23% ・アルカリ分 31% ・苦土 3%	45kg/10a	能登の土壌に適した成分を厳選して配合。高溶出ケイ酸など多様なケイ酸を含有しているほか、苦土・鉄などの成分も補給できる。
BB 鉄腕ソイル	・ケイ酸 20% ・アルカリ分 34% ・鉄 16.5% ・苦土 1%	60kg/10a	土壌 ph を矯正し吸収されやすいケイサンを豊富に含みます。また、鉄を多く配合し老朽化水田の「秋落ち現象」予防効果が期待されます。
ようりん	・リン酸 20% ・ケイ酸 20% ・アルカリ分 45% ・苦土 12%	80kg/10a	土壌の酸性の矯正に効果が期待される他、根張りを良くし、初期生育の促進や有効分げつを確保する効果が期待できる。
ケイカル	・ケイ酸 30% ・アルカリ分 45% ・苦土 4%	100 kg/10a	土壌の酸性の矯正に効果が期待される他、水田土壌へのケイ酸供給がなされることで、茎や葉が強固になるとともに登熟の向上が期待される。

3 深耕の実施について

- ・深耕により作土が増えることで、土壌の養分保持力が大きくなり秋落ちの防止対策となる他、稲の根圏域が広く確保されるため、干ばつ等の影響を受けにくくなります。
- ・耕起の際は、作土深を確保するため、トラクタの作業速度を落とし、ロータリー回転速度も低速にして、作土深15cm以上を確保しましょう(下図参照)。特に、低地力地帯では、乳白粒や未熟粒等による品質低下を防ぐことができます。

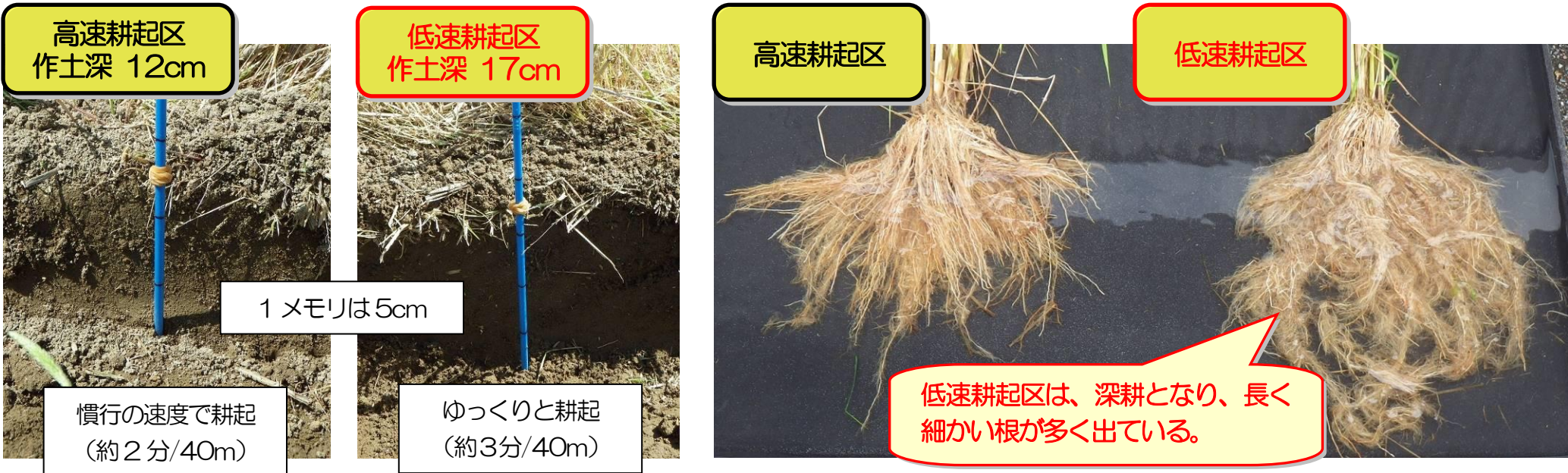


図3 深耕による作土の増加と根域の拡大 (中能登農林総合事務所調べ (場所：宝達志水町))

4 収穫後の雑草防除について

(1) 本田の難防除雑草(オモダカ・クログワイ)

- ・難防除雑草であるオモダカやクログワイ等の塊茎を持つ雑草が多く発生したほ場では、収穫後から対策を行い、次年度の発生を抑制しましょう。

< 対策 >

- ・難防除雑草対策には、①薬剤防除と②耕種的防除を組み合わせ、数年かけて塊茎を減らしていくことが大切です。
- ①薬剤防除
 - ・収穫後、再生した雑草の茎葉への浸透移行性除草剤(下表参照)の散布が有効です。
- ②耕種的防除
 - ・秋起こしでは、雑草の塊茎を土壌表面に露出させ、冬期の乾燥と冷氣により枯死させます。
- ※ ただし、浸透移行性除草剤の散布後に秋起こしする場合は、除草剤の種類により塊茎が枯死するまでの時間が異なるため、耕起するタイミングに注意して下さい。

(2) 畦畔の雑草(斑点米カメムシ対策)

- ・斑点米カメムシは畦畔などの雑草地で越冬し、春先に産卵することで被害を増やします。
- ・畦畔や農道での長期残効型畦畔除草剤*の散布または草刈りを行い、斑点米カメムシの越冬場所をなくしましょう。
- ※カソロン粒剤 6.7 は能登米生産においても使用が可能です。

雑草対象	除草剤名	成分数	使用時期	使用量	希釈水量	使用回数	効果の発現
(1) 本田の難防除雑草	(浸透移行性除草剤) ラウンドアップ マックスロード	1成分	耕起前 (雑草生育期)	(多年生雑草) 500～1000mL/10a	通常散布 50～100L/10a 少量散布 5～50L/10a	1回	(多年生雑草) 7～14日
	(浸透移行性除草剤) サンフーロン液剤		耕起 20～10日前 (雑草生育期)		50～100L/10a		5～14日
(2) 畦畔の雑草	(長期残効型畦畔除草剤) カソロン粒剤 6.7	1成分	秋冬期～春期の雑草発生前	4～6kg/10a	—	1回	10～20日

※ 収穫後の除草剤使用は、翌年産の農薬使用成分数にカウントされますのでご注意ください。

稲わらやもみ殻等の有機物は環境に配慮して焼却せず、水田に全量すき込み、次年産に向けた土づくりに生かしましょう！「能登⑧③④①たんぼづくり運動」では、生活環境への配慮や二酸化炭素削減のため、収穫後の稲わらの焼却を禁止しています。(能登のやさしいたんぼづくり技術項目)。

